地域ともっとつながろう

かけはし隊が行く

地域とのつながりを通して考えたこと

kakehashitai

学生ボランティア本部「ボラんち。」（法学部2年）　近藤　彩野

私は、新潟大学学生ボランティア本部「ボラんち。」に所属しています。「ボラんち。」とは、2004年の10月23日の中越地震をきっかけに発足した団体であり、ボランティアコーディネートを中心として、学内、地域を問わずボランティアを扱っています。

私は、4月に内野小学校で愛桜会（あいおうかい）の方たちと花見の監視ボランティアをしました。ちなみに内野小学校の桜は、愛桜会の方たちが植えて、育ててきたそうです。

仕事内容は、木の枝を折る人や路上駐車で迷惑な止め方をしている人を注意したり、サッカーボールで遊んでボールをける人から他の花見をする人を守ったり、火を使っている人を注意して火事になることを防いだりなどです。

「楽しく花見ができるのはあなた達のおかげ」と言ってもらえたこともあり、この言葉をかけて頂いたときはすごくうれしかったです。お花見をしている団体からお菓子をもらったこともあります。

写真にあるのは、5月の下旬に内野小学校で行った「桜の肥料やり」の写真です。当日は雨が降っていたのですが、それにも負けずに頑張りました！　内野小学校の児童達と桜に肥料をあげる（直径30cm位穴を掘り、その中に肥料を入れて、土と混ぜる）作業をしました。思っていた以上に土が固くて大変でした。

花見の監視ボランティア・肥料あげなどの活動を通じて、桜を守っていくことの大変さを知りました。また、これらの活動は、自分にとって良い経験になったと思います。私は、普段から、積極的に地域と関わっているというわけではありませんが、今回の活動を通じて、外に目を向けて何が問題なのか、とか、大学生だからこそ出来ることは何か？　ということを自分で考え、実行できる人になりたいと思いました。

来年も行うので興味のある方は、是非参加してみてください。

●花見の風景

●愛桜会の方々と反省会

●桜の肥料あげ風景

ボランティア

kakehashitai

地域と結びついた学生生活を送る機会がたくさんあるのが、新潟大学の特徴のひとつ。
学内だけでは経験できないことが、みなさんをさらに成長させてくれるはずです。
地域と積極的に関わってきた先輩たちの声を聞いてみましょう。

私達にできること

kakehashitai 朱鷺

大学院自然科学研究科2年　松 元　淳

現在、私は、新潟大学が行っている地域貢献プロジェクトのひとつの「トキ野生復帰プロジェクト」に参加しています。佐渡島の小佐渡東部にある「キセン城跡地」と呼ばれる山中で、放棄された棚田を再造成したビオトープ群の調査を行っています。このビオトープ群は、トキ野生復帰の際の餌場として期待されています。私は、このビオトープ群の植物群落と水環境を調査し、今後のトキの餌場として利用する際の管理方法について研究しています。

私は、卒業論文を作成していた2年前からこのプロジェクトの中で研究を行っています。このプロジェクトには新潟大学だけでなく地元の人や多くのボランティア団体が参加しています。大学の中では、同世代の人たちとの関係が中心です。しかし、大学から一歩出ることによって世代を超えた新たな関係が生まれます。私も、このプロジェクトに参加し、地元の人やプロジェクトの参加メンバーなど多くの人と出会うことができました。また、調査の際は、大学が佐渡市から借りている宿舎で研究室の仲間や他の参加メンバーと共同生活を送っています。このような、参加メンバーとの共同生活や地元の人と交流することで、新たな発見や、双方の理解を深めたりすることができます。そうした経験によって、自分が地域に貢献していることを強く感じることができます。

トキの野生復帰という同じ目標に向かって大学と地域が一緒になって活動することは、地域の活性化につながります。また、地域では、過疎や高齢化が進み「若い力」が不足しており、私達の地域貢献は大きな意味を持っています。「地域貢献」とは、私はどんな小さなことでもやることに意味があると思います。このような学生のときの様々な経験は、これからの人生において何物にも替えられない財産になると思います。

●キセン城のビオトープ群

●調査の様子

●宿舎での共同生活

雁木づくり活動から学んだこと

工学部建設学科4年　柳谷　理紗

工学部建設学科建築学コースでは、3年次の「建築計画演習」の授業の中で雁木づくりの活動が行われています。長岡市栃尾表町という雁木を特徴とする町に入り込み、グループに分かれ雁木のデザイン案のコンペを行います。そして町民の投票によって一位に選ばれたものが実際建設されます。私は3年次に高専から新潟大学に編入してきましたが、志望した理由はこの授業があったからでした。学校の中だけでなく人々と触れ合い地域を知りながら実践ができるのを楽しみにしていました。その上、一位を獲得でき建てられると決まった時の喜びは本当に大きかったです。

しかしながらコンペ案を考えるのも、実施案を詰めるのも想像以上の苦労が伴いました。普段の設計課題では気にしなかった構造の制約や、積雪や雪下ろしのこと、施主の要望を受けてどう提案するかということを考えねばなりません。またグループ7人の意見や考えを一つにしていく難しさを感じました。実施に至るまでがさらに辛く、納まりや照明の位置など何度も模型を作り直し検討しました。そんな中であたたかく私達をもてなしてくれた町の方の笑顔があったことが喜んでもらいたい、より良いものを作りたいと頑張れる力となりました。

雁木を建て終えた今、住民の意見を聞いたり後輩に説明したりすることで、この町に残り皆に語り継がれていくのだなと実感し、一つのデザインが与えるまちへの影響の大きさがわかりました。地域に出て活動することは相手があってこそで一人では完結しないことです。自分達の案をぶれることなく説明する能力、相手を説得させることができる提案力などの大切さを学ぶことができました。今回の経験は、設計することの大変さと責任の重さを思い知り、設計を仕事にするかどうか悩ませる出来事にもなりました。しかしそれでもまちに合ったものを提案し、人々に愛されるものをつくっていけるよう、これからも学んで行きたいと思っています。

雁木

●まち歩き
活動は5月に始まり、最初に住民と共にまちを歩き、その特徴や雁木について学んだ。写真の雁木は2つ上の代の学生によるもの。

●最終プレゼンの様子
9月に行われた住民に対する最終プレゼンテーション。住民の厳しい目が光る。

●最終プレゼンで施主と班担当のまちの方と
一班に対し町の担当の方がおり施主の方と共に、意見をもらったり休ませてもらったりとお世話になった。（本人は前列左）

●完成した雁木
12月下旬に施工完了した。コンセプトは「おもてなしの雁木」。雁木と家との間を中庭と見たて、古材とアーチの組み合わせが中庭を包み込むよう計画した。

かけはし隊が行く

ミネソタでアメリカの医療を体験する

kakehashitai 留学

医学部医学科6年（当時）　池田　伸

新潟大学医学部は例年、米国ミネソタ大学の関連病院に実習生を派遣しています。この制度により、私は2006年、米国の医療を10週間に渡って体験する機会に恵まれました。

期間中3つの科を回りました。Hematology/Oncology（血液・腫瘍内科）、Rheumatology（膠原病科）、そしてInfectious diseases（感染症科）です。実習の内容はとてもここには書ききれません。当時のブログをご一読いただければ幸いです。実習の内容やミネソタの雰囲気が分かると思います（http://ikedas.cocolog-nifty.com/blog/2006/04/index.html）。

この稿では、米国の医学教育・医療事情の特徴をいくつか挙げたいと思います。

米国の医学教育は極めて実践的です。学生といえども、独りで患者を診察し、過去のカルテや検査データも調べて患者の状態を評価し、さらに検査と治療のプランまで考えて指導医に呈示しなくてはなりません。現地の学生は当たり前のようにこなしています。

次に教育意識の高さです。Morning reportやnoon conferenceといった勉強会（無料で食事が出ます）が毎日のように行われます。学生教育はドクターの仕事の重要な一部であるという意識が浸透しています。

患者の社会的背景も様々です。英語が話せない患者も多く、病院にはスペイン語、ソマリ語、ロシア語などの通訳者が多数雇用されていて、必要ならすぐ呼び出せます。健康保険も日本と違って多様であり、無保険の患者もよく見かけます。保険内容に応じて適切な治療法や検査を選択せねばなりません。

新潟から、というより日本から遠く離れた地での実習でしたが、異国の地で生活しながら、ともかくもカリキュラムをまっとうできたことは大きな自信になりました。経験したことのない環境に飛び込むのは勇気のいることですが、それに見合っただけの収穫も得られると思います。在学生の皆さん、そしてこれから大学に入る皆さん、是非チャンスを逃さず、大きな一歩を踏み出してみて下さい。

●ミネアポリスの中心部を望む。

●通勤途中。下宿先からバスと電車を乗り継いで、30分程かかりました。

●実習先のHennepin County Medical Center（HCMC）の入口付近。4つのビルが連なる巨大な病院です。

●帰国の数日前、ミシシッピーの支流でカヌー乗りをしたとき。右から留学生3人（犬塚さん、井林さん、私）、留学の世話をして下さったミネソタ大学のDr. Watson、その娘さんです。